Akita University

秋　田　大　学
教養基礎教育研究年報
23 － 29　（2007）

大学生が考える「遊びの中の学び」

山名　裕子

What is “ Leaning in Play ” Reported by University Students ?

Yuko YAMANA

In this paper, the significance of “ learning in play ” is discussed after collecting university students ’ psychological data concerning their own play in their childhood. The most frequent descriptions regarding their “ learning in play ” were concerning human relationships. The other aspects were also reported such as acquiring social rules or standards, and divergent thinking processes and various cognitive abilities. It seems important that students themselves realize what they concretely learned while playing in order to really understand the significance of “ learning in play ”. It is suggested that various characteristics of child development might be concretely recognized by reflecting their own experiences in their childhood in a university course regarding life-span developmental psychology.

Key words: life-span developmental psychology, view of development, kindergarten education, childhood

問題と目的

幼児期においては，「遊び」が重要な役割を果たしているということは，おそらく多くの人が認めるところであるだろう。しかし「遊び」と一言でいっても，いろいろな遊びがある。例えば，おままごと遊びや，秘密基地作り，縄跳び遊び，言葉遊び，体操遊びなど，「○○遊び」と呼ばれるものは数多く見られる。しかし，「遊び」とは名ばかりの，いわゆる，小学校の先取り教育や，おおよそ「遊び」とはいえないようなものまで存在している。

矢野（1995）は，「遊びは，生存のための現実的適応的行動や，他の目的のための手段的・道具的な仕事や勉強，労働とは区別される非効率的非生産的な余分な行動で，行動自体の楽しみのための自由で自発的な行動である（p. 24）」と定義している。また同様に野尻（2004）は「子どもにとっての遊びは生活そのものであるといわれるように，子どもは日々の遊びの中でさまざまな経験をする。（中略）自分の興味に基づき自発的に展開する活動としての遊びにおいて，物的にも人的にも多様なかかわりをもつことは心身の調和のとれた発達の基礎となり，また総合的な発達が期待できる（p.64）」と述べている。

幼稚園教育要領解説においても言及されているように，「遊びは遊ぶこと自体が目的であって，人の役に立つ何らかの成果を生む出すことが目的はない。しかし，幼児の遊びには幼児の成長や発達にとって重要な体験が多く含まれている（p.28）」がゆえに，幼児期では「遊びを通した総合的な指導」が中心となる（文部省，1999）。

また最近では，幼小連携という観点から，特に幼児期での学びと児童期以降の学びの接続にも関心が集まっている（無藤，2004）。しかし，幼児

Akita University

期において遊びを通して学んでいることを，児童期以降の学びの基礎として，どこまで理解されているかというと疑問が残る。

生涯発達心理学」－幼児期－の授業でも，このようなテーマを取り上げているが，実際に大学生は幼児期における「遊び」や「学び」というものどのように捉えているのだろうか。

本研究では，大学生が幼児期から児童期にかけての遊びを振り返り，遊びを意味づけたり，説明したりすることによって，大学生自身が，幼児期での遊びをどのように位置づけ，どのようなことを遊びの中から学んだと思っているのかを考察する。さらに，生涯発達における幼児期のあり方として，どのように授業を組み立てたり，あるいは「遊びの中の学び」をどのように伝えたりすることが，学生に対してより理解を促すことになるのかを検討する。

方　　法

調査対象者　「生涯発達心理学」－幼児期－」を受講する教育文化学部の学生62名。その内訳は，学校教育課程１年生15名，２年生24名，３年生10名，４年生２名，地域科学課程１年生から３年生まで各１名，人間環境課程２年生２名，３年生１名，国際言語文化課程２年生５名であった。

調査材料　Ａ３版１枚（横置き横書き）の左半分には，幼稚園あるいは保育園での生活を問う質問が書いてあった。右半分には二つ質問が書いてあり，一つは，幼児期（３歳～６歳），児童期前半（低学年），児童期後半（高学年）ごとに，①よくしていたこと，遊び，②遊びの中から“学んだ”こと，③人とのかかわり，④印象に残っていること，の4項目について覚えていることなどを自由に記述してもらった。もう一つは，幼児期の過ごし方や，遊びについて自由記述を求めた。本研究では，②遊びの中から“学んだ”ことに関する記述の分析と，幼児期の過ごし方や，遊びについての自由記述の分析を行った。

調査手続き　「生涯発達心理学－幼児期－」の第12回目の授業「幼児期における遊びの意味（2006年６月27日，１・２限目）」において，Ａ３版の用紙を配布した後，３つの問いについて自由に記述させた。各自が提出する内容については，単位取得に関する評価の対象にはならないことも伝達していた。所要時間はおよそ30分であった。

結果と考察

本研究では，②遊びの中から“学んだ”ことに関する記述の分析と，幼児期の過ごし方や，遊びについての自由記述の分析を行った。

１．遊びの中から“学んだ”こと

遊びの中から“学んだ”ことについて書かれたものを分類したところ，Table１のようなカテゴリに分けられた。上位カテゴリとして「人間関係」，「規範意識」，「役割取得（ごっこ遊び）」，「想像／空想」，「自然」，「思考」，「表現」，「運動／器用さ」，「楽しさ」，「その他」の10カテゴリに分類した。そのうち，「人間関係」，「規範意識」，「役割取得」，「想像／空想」，「自然」，「思考」には下位カテゴリを設定した。「人間関係」には，「人を思いやる」や，「道具の貸し借りなど譲り合う心」などと記述している「道徳性」や「協調性」，「人とのかかわり」，そして「女の子は優しい」というような「性差」が含まれる。「規範意識」には，「ルールを守ること」や「やっていいことと悪いこと」などに関する言及が含まれている。「役割取得」にはごっこ遊びや他者からの見られ方などが下位カテゴリとして含まれる。「想像／空想」カテゴリには，想像力や絵本の中の世界，さらに「外の世界っていろんなものがあるということ」などに代表されるような「世界の広がり」が下位カテゴリとして含まれている。「自然」には，動植物に関すること，自然の心地よさといった，自然全般に関すること，あるいは磁石の使い方など科学についての言及が含まれる。さらに「思考」には「新しい知識を得たり，新しいことをすることの楽しさ」というような「考える力」，「試行錯誤すること」，「創造性」に関する記述が含まれる。

各カテゴリが幼児期，児童期前期（低学年），児童期後期（高学年）でどのように言及されているか，その言及数と割合を算出した（Table１）。ただし，複数回答している対象者がいるので，各時期の合計数は調査対象者数よりも上回っている。

本研究では，これらのカテゴリを，社会性に関する学びと認知能力に関する学びという２つに分けて分析した。

Akita University

Table 1　「遊びの中の学び」に関するカテゴリと言及数

（）内は%

カテゴリ	記述例	幼児期	児童期（前期）	児童期（後期）
人間関係		**23 (24)**	**33 (38)**	**35 (46)**
道徳性（向社会性）	人を思いやること／年下の子にはやさしくすること／道具の貸し借りなど譲り合う心	6	4	3
協調性	協調性／まわりにあわせる／妥協が必要だということ	7	11	6
人とのかかわり	友達とのコミュニケーションの仕方／人と接することの大切さ	8	16	24
性差	女の子は優しい／男は女より力が強い／女の子らしく・・・	2	2	2
規範意識		**13 (14)**	**10 (12)**	**3 (4)**
ルール	順番を守ること／遊びの中にもルールがあること	11	7	2
規範	あいさつなど生活に必要な基本的なこと／やっていいことだめなこと／今は～する時間だと理解すること	2	3	1
役割取得（ごっこ遊び）		**7 (8)**	**1 (1)**	**4 (6)**
ごっこ遊び	おままごとでの役割や切り方／役になりきることの難しさ	6	0	0
役割	役割分担して協力	1	1	1
他者の視点	自分のしたいようにでは友達とのかかわりがうまくいかないということ	0	0	3
想像／空想		**11 (12)**	**2 (2)**	**8 (11)**
想像／空想	想像力／自分ができないことを人形にやらせることの楽しさ	8	2	1
世界の広がり	外の世界っていろんなものがあるということ	3	0	7
自然		**9 (10)**	**7 (8)**	**0**
動植物	カエルの卵の感触／たくさんの草花の違い	2	1	0
自然一般	自然の工夫／風が気持ち良い	5	3	0
科学	磁石の不思議	2	1	0
生命	命の大切さ／生きているものはいつか死ぬということ	0	2	0
思考		**9 (10)**	**10 (12)**	**8 (11)**
考える力	新しい知識を得たり、新しいことをすることの楽しさ	5	6	5
試行錯誤	試行錯誤すること／いろんな工夫が遊びの中でできるということ	2	0	2
創造性	創造性／いろいろな遊びを考え出すこと／いろんな絵本を読んで登場人物の気持ちがどんな風に動くのかということ	2	4	1
表現	自由に表現すること，できること／何かを作ったり書いたりする面白さ	**6 (7)**	**2 (2)**	**1 (1)**
運動／器用さ	外でボールを使って遊ぶこと(体を動かして遊ぶこと)の楽しさ／手先の器用さ	**5 (5)**	**12 (14)**	**7 (10)**
楽しさ	楽しかった／おもしろかったとしか，漠然と記憶に残っていない	**6 (7)**	**4 (5)**	**4 (6)**
その他	その他／大人に対する観察力	**3 (3)**	**3 (4)**	**2 (3)**
合計		92	84	72

Akita University

（1）社会性に関する学び

人とのかかわりやルールの獲得など，社会性に関するカテゴリの分析を行った。まず，どの時期においてももっとも言及者数が多かったのは，「人間関係」であり，幼児期23名（24%），児童期前期33名（38%），児童期後期35名（46%）と年齢が上がるにつれ，割合も増加していた。どの時期にも，そしてどのカテゴリよりも割合が高かったことにより，遊びを通して社会のルールや友達関係を学んできた，という学生が多いことが明らかになった。さらに幼児期においては，「規範意識」が次いで高く（13名（14%）），児童期前期でも比較的高い割合を示していた（10名（12%））。幼児期では，「順番を守る」「集団で遊ぶときにはルールが必要」といった記述が多くみられた。

幼稚園や保育園に入園する時期では，もちろん，家庭とは違う人間関係を構築する必要がある。そしてその多くを遊びの中から学んだと考えている大学生が多いことが示された。しかし，そのルールの獲得やコミュニケーションのあり方などは，悪い意味で指導的になる恐れがある。たとえば，遊びの中で「順番を守る」ということはもちろん，必要なことでもあり，幼児期に獲得されると思われる社会性である。だが，ルールの成立過程や，社会性の発達は，非常に複雑でもあり，年齢があがるにつれて単純にできるようになるものでもない。清水（1996）は，遊びとしての学習には，ある意味でいい加減な，ゆとりがあると述べており，「ルールでさえ自分たちで作っていけるし，臨機応変にルールを作り替えることもできる」と言及している。山名（2006）では，大学生における発達のイメージを整理し，「発達」といってもいろいろなモデルがあることを示した。その中のモデルで大学生の多くがイメージしていたのは「単一の単調増加的な発達モデル」であったが，そのような年齢に伴って単調増加するだけではない，発達のとらえ方や，発達を援助する，あるいは指導するときの発達観を，具体的に議論する必要があるだろう。

（2）認知能力に関する学び

次に，認知的な能力に関するカテゴリについて分析した。ごっこ遊びに代表されるような「役割取得」に関しては，ままごとでの役割や，役になりきることの難しさについて，７名（８%）が幼児期の学びとしてあげている。また想像力や空想の世界，あるいは「自分の知らない世界」について学んだという割合は，幼児期11名（12%），児童期前期２名（２%），児童期後期８名（11%）であった。特に児童期後期の７名は，想像というよりは，自分の周辺だけではない世界の大きさのような理解が含まれていると推測された。

ままごと遊びに代表されるようなごっこ遊びは幼児期によく見られる遊びの一つではあるが，このような遊びが出現するには，様々な認知能力が必要となってくる。たとえば，お母さん役の子どもやお姉さん役，赤ちゃん役というような役割も，ままごと中ではそれらしく演じる。お母さんぽい口調になったり，「赤ちゃんなんだから歩いちゃだめ」というように，行動をそれらしく真似ようとすれば，行動や態度，他の人への接し方まで変えないといけない。ましてやそのような設定を複数の友達で共有しようとすれば，それぞれのお母さんや赤ちゃんなどのイメージを共有し，その状況にのる必要がでてくる。あるいは，丸いボールをリンゴに見立てたり，見立てたリンゴを切ったことにして，お皿に盛りつけたりというような一連の行動も，その順序が違えば意味のない文脈になってしまう。

このようにごっこ遊びが成立するためには，様々な認知能力が関係してくる。大学生が実際に保育者になって子どもと接するようになったとき，そのような子どもの行動をどのように見取っていくかによっても，指導の仕方が異なってくるだろう。

「自然」に関しては，幼児期９名（10%），児童期前期７名（８%）が言及していたが，児童期後期は０名であった。児童期後期になると，遊びの中で学ぶというよりは，「教科」での学びになると考えられる要素が強くなるため，もしかしたら，児童期後期では言及されなかったのかもしれない。自然の中で体験すること，動植物に触れた経験は，大学生になっても覚えており，「あの頃（幼児期や児童期前期）は自由だった」というように振り返る大学生も多かった。

さらに「新しい知識を得たり，新しいことをすることの楽しさ」に代表されるような「考える力」や，試行錯誤する過程，創造性に関する記述は，

Akita University

幼児期９名（10%），児童期前期10名（12%），児童期後期８名（11%）と，どの時期でも遊びを通して学ぶこととしてあげている大学生が１割程度みられた。「いろいろな工夫が遊びの中でできる」「思っていることを形にする」というように，自らが自発的に行う遊びの中での試行錯誤する過程や，創造性を働かせることを学んだと振り返っていた。遊びの過程をみると，その過程において学ぶ態度の基本が養われると言われているが（高杉，2006），これは児童期以降の学習の基盤となる考える力，そのものである。大学生の回想の記述ではあるが，幼児期に遊びの中で考える力を学んだと感じていることは非常に重要な点であるだろう。

２．幼児期の過ごし方や遊びについての自由記述

Table２では，幼児期での遊びや特に印象に残っていることなどを自由に記述させ，その中から特に，遊びの能動性，大人や友達との信頼関係，発達の基盤としての遊びという観点から分析した。

（1）遊びの能動性

前述した「遊びの中の学び」に関するカテゴリとも関連しているが，Table２で記述されている内容は，自分が積極的に能動的にかかわる遊びの中で学んだということを示唆している。「季節のにおいに敏感だった」「裏山に登ったり川に行ったりなど外で遊ぶ機会が多かった」というように自然体験の中で感じたことが，大学生になってからも思い起こされるということは，保育者になったときにも，自然に対する感性を活かすことの土台となるであろう。

また「毎日同じようなことばかり繰り返した。しかしその同じように繰り返す中でそれが徐々に変化し，より現実的なものになっていった」「ひたすら遊んで楽しかった」という遊びを繰り返し行うことによって培われていく思考過程など，幼児期特有の自発的な遊びが保障されることによって育まれることの重要性を示している。

（2）大人や友達との信頼関係

遊ぶ過程にておいて，大人からの見守られ方や友達との関係が重要であるという自由記述も多くあった。「養育者との信頼関係があればこその“自由”な活動であり，後の発達にも影響をよくも悪くも与えるものが“遊び”であると感じた」というように，子どもが「自由に」遊ぶためには養育者との信頼関係がなければ成り立たないと述べている。これは養育者にかかわらず，保育者にも言えるだろう。一方で「もっと子どもらしくといわれてきたが，私にとってそれは苦痛だった」と大人の価値や子どもに対する認識不足（過小評価）が，個々の遊びを束縛する可能性を示す記述あった。しかしこの記述は「だから，子どもの個性を尊重し，大人は目をやるだけの遊びが理想である」と続いている。ここに書かれている「目をやる」ということは，ともすれば何もせず，ただ「見ていればよい」という意味を含んでいるかもしれない。「見守る」ということも，もしかすると，こういう受け止められ方をしている危険性がある。

また「遊びに誘ってくれた友達がいて本当に救われた」というように，遊びを媒介にして，それまでとは違う人間関係や友達関係を築いていく重要性も述べられていた。この記述には大人との関係は述べられていなかったが，もちろん同年代の子ども同士の関係も幼児期や児童期にとっては大きな問題であるかもしれない。

（3）発達の基盤

Table２に示されているように，このカテゴリに入る記述の多くは，「幼児期での経験がその後の自分の人生に影響している」というものであった。幼児期の発達の話をしていても，実際に大学生がどれだけ実感をもって聞いているのかを把握することは難しい。しかし，自分自身の発達の過程をふり返ることによって，幼児期の意味づけを具体的にできた可能性がある。また多くの学生は幼児期の遊びの重要性を認識しているものの，どういう点が重要なのかという議論になると，具体的に述べられない場合が多い。その際に，自分の経験を基に思考を発展させたり，議論を深めたりする必要はあるだろう。生涯発達の幼児期の位置づけを，自分なりに考えるということは，自分の人生を振り返り，考えることにもなるのではないだろうか。

Akita University

Table 2　幼児期の過ごし方や遊びに関する自由記述（抜粋）

カテゴリ	自由記述例
遊びの能動性	・あのころは楽しかったなあと思いました。今ではほとんど見向きもしないような雑草をわざわざ鉢に植えてから水をやって育てたり，虫をたくさん触ったり，季節のにおいに一番敏感だったりしたのがあのころです。大人になるにつれて忘れていってしまう大切なことを幼児期にめいっぱい感じられたんだと実感しました。そういうことが，私にとってはかなり自分の感性や情緒的な面に影響を与えられていると思います。あの時遊んでいなかったら自然の楽しさや感動など何も知らずに育って，寂しい人間になっていたと思います。
	・私の地元は田舎なので，幼児期は裏山に登ったり川に行ったりなど外で遊ぶ機会が多かった。また，子どもの人数も少なかったのでどちらかといえばみんなで遊べる遊びが多かった気がする。
	・幼児期はやることすべてが初めてでどんなことでもおもしろがってやっていた気がします。大きくなると汚れて遊ぶのも抵抗が出てくるが，幼児期に泥まみれになってもそのようなことも気にせず自由だったと思います。いろんなことに興味があって危険なこともわからないでどんどん遊んでいた気がします。
	・幼児期は，児童期と違い毎日同じようなことばかりやっていたと思った。しかしその同じようなことを繰り返すなかでそれが徐々に変化し，より現実的なものになったりしていった(同じものでもルールを変えたりするようになった)。また，ごっこ遊びやままごとなど人の真似事をよくやっており，そこから生活のルールなどを学んでいたのかもしれないと今になって改めて感じた。ただ毎日を過ごしていたと思ったが，よく考えると周囲をよく観察し，積極的に新しいことにチャレンジしていたと思う。
	・幼児期は時間が短かったように感じる。それだけただ夢中になって悩みなどもなく，ひたすら遊んで楽しんでいた。何かの真似をする「ごっこ遊び」や自分の表したいことを作る・描くなどの遊びをしていた。「今日は～をする」と決められていなくて，偶然現れたことによって「じゃあ～しよう」という感じで遊んでいた。先生が大好きで何かするたびに「先生見て!!」と先生の興味をひきつけたがっていたと思う。
	・幼稚園のことなんて何も覚えてないよと思ったけど，意外に多くのことを思い出すことができたので自分でも驚いた。やはり，幼児期での友達とのかかわりは，遊びの中が中心なので，遊びというものは重要なものだと考える。しかも，大人がやらせるようなものでは意味がなく，子どもたち自身が自ら考える能動的な遊びがもっとも重要なのではないだろうか。昔はとても発想力豊かだったなと改めて思った。
大人や友達との信頼関係	・とてもインドア派な子だった。外に目を向けるべきときも常に内観し，本とばかり会話していた。だから，「親を失う」という悲しみや「恋」や「怒り」も私は3～6才くらいの時に本に教えられた。こういう幼児期はあまり子どもらしくなく，大人は生意気だと思うかもしれない。もっと子どもらしくといわれてきたが，私にとってそれは苦痛だった。だから，子どもの個性を尊重し，大人は目をやるだけの遊びが理想である。
	・子どもの好きなように，感じたままに活動させる。つまり遊ばせるということが大切だと思いました。しかし，「好きなように」とか「感じたままに」というのはとても抽象的な表現で漠然としすぎています。養育者との信頼関係があればこその「自由な」活動であり，後の発達にも影響をよくも悪くも与えるものが‘遊び’であると感じました。
	・私は今でも友達を自分から何かに誘ったりということは苦手だが，それは幼児期からのものだった。しかし友達ができないという子ではなかったので，児童期とかは友達に救われてたなと思う。それにともなって，幼児期は近所の友達よりは，兄弟と遊ぶほうが緊張しなくて楽なのであまり友達と遊んだ記憶がない(全然遊ばなかったわけではない)。しかし，そんな私を遊びに誘ってくれた友達がいて本当に救われた。私と友達をつなぎだしたのは遊びだったのかもしれない。
発達の基盤	・私はよく，親や親戚に「一人遊びの上手な子どもだった。」といわれるのだが，こうやって振り返ってみるとお絵かきや読書など一人で遊ぶことが多いし好きだったのだと実感した。しかし，年齢を重ねていくにつれて友達と一緒に遊ぶことが増えていったのが興味深いと思う。だが，今でも絵を描いたり，読書をしたりすることは好きなので，幼児期の遊びで培われたものが私のベースのようなものになっているのだろうかと感じた。また，幼稚園のころのことは覚えていないと思っていたが，振り返ると割と覚えているものなんだと驚いた。
	・本当にいろんなことがあったけど，なかなか覚えていることも多い。友達といることが多かったけど一人でいても何かしらで，暇をつぶしていたと思う。デタラメな歌を歌ったり…何をするにも遊びと絡めていたので思い出すときりがない。でも，それが今の私を作っているのかと思うと感慨深い。
	・幼児期に好きだった遊びというのは，今も好きなものが多いと思いました。たとえば，プールなどで水に触れることや，絵を描くことは今でも好きです。また，自然に触れたりすることも好きなので，幼児期に花の蜜を吸ってみたからこそ今「この花は蜜があるんだよ。」という知識があります。
	・集団生活のルールや人との関わり方など，社会に出るための最も基本的や部分は幼児期の「遊び」を通して学び，身につけた気がする。幼稚園のころに楽器と触れ合う機会が多かったから音楽が好きになったような気がするので。大きくなってからの趣味などにも幼児期にどんな環境で育てられてきたかは影響してくると感じた。
	・だんだん年が上がるにつれて，勝ち負けがつく遊びが多くなり，その中で負けたときにすねたりするのではなく相手を認めることの大切さを学んだ。授業では学ぶことができない感情や思いやり，悔しさなどを感じる遊びは人生の糧であると思う。
	・こうやって書き出して考えてみると，今の私の形成に大きく影響を与えているように思った。
	・まだ学生だから断言できないけれど，小さいころの遊びはその人の人生を反映しているような気がする。
	・今考えてみると，私は結構のびのびと自由に育てられたんだなとわかります。小さい頃の体験や経験が現在に大きく影響を残しているようで，幼児期の遊びの重要さが意外と深刻であることを知り，驚きました。

注）下線は著者による

Akita University

おわりに

本研究では，大学生が考える「遊びの中の学び」を分析した。「幼児期の発達」といっても，大学生が幼児をどのように捉えているのかは，実際，把握することは難しい。しかし，自分の記憶をたどり，どのような生活を送ってきたか，どのような遊びをしてきたかを考えることによって，具体的な経験を通して，発達のあり方を考えるきっかになるのではないだろうか。子どもの遊びを丁寧に読みとる視点は，「発達に応じた指導」「個に応じた指導」の基礎となる。それはすなわち，幼児期における生活そのものを理解し，生涯発達の視点からの幼児期の意味を問い直すことにもなるであろう。そして決して単一増加ではない発達の過程や，一生涯にわたる「学び」の意味をより深く捉えることができるようになると考えられる。

このように，抽象的なレベルだけではなく，経験に基づく具体的なレベルから，発達のとらえ方を考え，幼児期での遊びの意味を問うことも，大学生の理解を促進する上では重要なことかもしれない。今後は，大学生が考える「遊びの中の学び」から，理論的な枠組みをより具体的に提示したり，発達を読みとる視点を授業の中で議論したりすることが，「発達に応じた指導」を考える上で必要になってくるだろう。

引用文献

文部省　1999　幼稚園教育要領解説　フレーベル館.

村井潤一　1987　発達と早期教育を考える　ミネルヴァ書房.

村井潤一　1992　発達の新しいとらえ方　村井潤一（責任編集）　新・児童心理学講座　子どもの発達の基本問題　Pp.1-59.　金子書房.

無藤隆　2004　幼小連携について考えておくべきこと　幼年教育年報，26，1-9.

野尻裕子　2004　遊び　森上史郎・柏女霊峰（編）　保育用語辞典　第３版　ミネルヴァ書房.

清水美智子　1996　遊びと学習－発達と教育における遊びの意義　高橋たまき・中沢和子・森上史郎（編）　遊びの発達学　展開編　Pp.130-152. 培風館.

高杉自子　2006　子どもとともにある保育の原点　ミネルヴァ書房.

山名裕子　2006　大学生における発達のイメージ　秋田大学教養基礎教育研究年報，８，23-28.

矢野喜夫　1995　遊び　岡本夏木・清水御代明・村井潤一（監修）　発達心理学辞典　ミネルヴァ書房.